

第四三七回 青葉会 令和四年九月二十三日(金) (於：東五反田パークタワー集会所)

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

投句・選句 今井紀久男 熊谷國男(くにお) 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 土谷堂哉

豊田ゆたか 中川雅夫 西澤國護 福島正明 古田昇 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 高橋敏郎 橋口隆 早川允章

山本三恵



《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十三点 秋耕のひと畝ごとに暮れゆけり 孤舟 (○そ・紀・忠・く・五・と・孝・清・
○康・堂・び・昇・盛)

十二点 ◎数多ある痛み思ひ出栗の毬 啓子 (紀・忠・孤・た・孝・龍・清・敏・雅・
正・三・盛)

河東節助六稽古

十一點 ◎声張り上げ心地良き哉秋の汗 紀久男 (孤・と・千・恵・た・孝・敏・隆・正・
け・天)

十点 右はなら左いせみち曼殊沙華 康敏 (紀・五・恵・堂・雅・允・啓・亜・天・盛)

九点 ◎木犀の香の染む雨となりにけり くにお (紀・孤・恵・ゆ・昇・○啓・規・亜・天)

八点 落鮎を提げて朝日を滴らす 孤舟 (紀・恵・清・○堂・允・啓・亜・三)

◎大花野登山駅から放たれて とみ子 (紀・孤・五・千・清・堂・け・三)

七点 お六櫛良夜の木曾に求めけり 康敏 (紀・○と・恵・○允・盛・け・三)

山峡の田にぼつねんと稲刈機 びん (そ・紀・く・健・堂・ゆ・規)

六点 隣人愛を説くトルストイ露寒し 盛雄 (紀・忠・く・○健・龍・三)

曼殊沙華明治を刻す墓の脇 啓子 (紀・千・國・び・隆・規)

五点 オペ迫り弱気叱咤の秋袷 紀久男 (そ・忠・と・允・正)

◎沈む陽が長い影成す秋の街 忠彦 (紀・孤・た・國・び)

四点 至福なり会津新酒の呑み比べ 全 (○紀・敏・允・規)

秋の灯がやつと点る夜双葉町 全 (紀・敏・隆・○正)

◎とんぼうの池面に触れてまた浮かび 五郎太 (そ・紀・孤・康)

葬列の威風堂々空高し
 坊ちゃんを読むは幾度目夜長し
 新人の素顔知らぬ間秋深む
 大切な人みな遠し天の川
 蒼天に翼を交はし鷹渡る
 秋高し海豚のショーの揃ひ跳び
 知事賞は宜(むべ) 風格の大南瓜
 雨雲の包む戸隠山(とがくし) 蕎麦の花
 十六夜はシャンソンの夜美酒の夜
 ◎八海山(はつかい)の細流を梳く下り築
 ど根性や岩の割れ目に草の花
 ショパン聴く一人となりし水の秋
 宵闇や犬引く人は無口なり
 大の字に寝て見る空や花野行き
 五郎太 (紀・そ・千・隆)
 健介 (紀・孝・龍・隆)
 全 (紀・敏・亜・三)
 孤舟 (紀・健・清・規)
 全 (そ・紀・〇敏・康)
 全 (恵・康・昇・け)
 惠洲 (紀・啓・天・盛)
 康敏 (健・國・敏・天)
 堂哉 (紀・ゆ・允・〇盛)
 びん (紀・孤・く・康)
 昇 (紀・く・千・ゆ)
 規雄 (紀・五・び・昇)
 けい子 (紀・五・康・規)
 全 (紀・ゆ・雅・啓)

三点

銀杏の強く匂ひし夜の坂
 探偵の好きなギムレット九月かな
 幕外で霊を鎮める秀山祭
 ◎泊船の灯更けゆく鯨の秋
 仰ぎ見るこの名月や誰に告げん
 荷風閉ぢ瞼も閉づや草ひばり
 お彼岸のおはぎ懐かし母の味
 ◎秋なればポトンと落ちる夜の帷
 月の雨波は静かにリズム取る
 五郎太 (紀・國・天)
 全 (紀・〇孝・け)
 全 (紀・亜・け)
 全 (紀・び・啓)
 くに お (孤・び・啓)
 とみ子 (紀・千・國)
 堂哉 (紀・孝・清)
 國護 (紀・た・〇昇)
 啓子 (紀・孤・〇敏)
 けい子 (紀・〇五・龍)

二点

アカンタレ夫婦で手術(オペ)の秋彼岸
 (胃癌と難聴)
 小鳥来る楠の大樹に声立てず
 ◎いつからか老人とされ敬老の日
 孫用の小さき団子の月見かな
 ブランコの影絵となりて秋入日
 むら雲にかくれんぼかな月今宵
 秋めくや装い変えてスカートを
 蚊の声にさつと手の出る秋団扇
 秀山祭松島屋の大星
 名調子仁左の大星秋芝居
 エリザベス二世陛下
 紀久男 (健・龍)
 全 (雅・び)
 忠彦 (紀・孤)
 全 (紀・敏)
 とみ子 (堂・ゆ)
 千恵 (紀・雅)
 全 (紀・正)
 ただしげ (忠・隆)

気品とはこれ爽やかに逝きたまふ
 蝸の声聞く夕べ愁い有
 庭の樹々鳥来て囀る秋賛歌
 すだれ越し木々ささやくや天異変
 虫の闇ひとときわ深き乱世かな
 惠洲 (紀・昇)
 ゆたか (紀・た)
 全 (た・雅)
 雅夫 (紀・龍)
 びん (紀・正)

十一句 声張り上げ心地良き哉秋の汗 紀久男

孤舟さん・・・公演に向けて懸命な稽古が続く。

とみ子さん・・・公演のご成功がこのお句から読みとれます。

千恵さん・・・久しぶりの稽古に全身で喜びを感じ熱中し心地よく汗をかく様子が伝わってきます。好きなことを一心にできるのは幸せなことですね。

ただしげさん・団十郎襲名「助六」の河東節の稽古の弾んだ感じが見て取れる。

恵洲さん・・・河東節に年季を重ねられる読み手に敬意を表して。二月が楽しみで

す。
隆さん・・・体験から生まれた佳句。「秋の汗」は気になる。練習の長さを込めて「秋暮れぬ」でも。

けい子さん・・・一生懸命河東節連中がお稽古される姿懐かしく思います 厄も去るでしょう。

天牛さん・・・名人でも声張り上げるんですね!!

紀久男（自解）・・・稽古はじめはいつも声を大きく張り上げます。声慣らしです。

コロナ対策で本番の出演者は三味線弾きを含め、これまでは36人、今回は半減の18人。自信はありますが責任重いです。

十点句 右はなら左いせみち曼殊沙華

康敏

恵洲さん・・・奈良と伊勢の分れ道に曼殊沙華が咲いている、古道と彼岸花の取り合わせに味わい。

堂哉さん・・・季語がピッタリですね。

啓子さん・・・平仮名で、なら、いせみち、と道標にある分かれ道。時代を越えて旅人が見詰めた道標の前に立つ作者。既視感のある秋の穏やかな景。

天牛さん・・・一本か二本か知りませんが曼殊沙華を使って広大ですね。

盛雄さん・・・吟行の旅は近鉄の榛原、長谷寺でしょうか。西に奈良、東に伊勢街道、人麻呂も赤人もここに立ったでしょう。

九点句

木犀の香の染む雨となりけり くにお

孤舟さん・・・雨を得て木犀が一段と高く香っている。

恵洲さん・・・雨に木犀の香が染みているようだという捉え方に繊細な感覚を感じます。

ゆたかさん・・・雨となっても木犀のよい香りか匂えば 楽しいですね

啓子さん・・・雨に染む香という表現に感じ入りました。

亜也さん・・・香だけなら月並みなのを、雨を染めさせることで出た、しつとりとした情感がいい。

天牛さん・・・雨に香が染むとはうまい云ひ回しですね。

八点句

落鮎を提げて朝日を滴らす

孤舟

恵洲さん・・・鮎からの雫が朝日を浴びている景を、朝日を滴らすとした表現を買います。

堂哉さん・・・家路を行く人の笑顔が素敵です。滴り落ちるのが朝日とは！参りま

大花野登山駅から放たれて
とみ子

孤舟さん……「放たれて」で、待望の大花野に着いた喜びが溢れている。
千恵さん……ケーブルカーの駅を降りたとたん目の前に広がる花野を観たとき
正に「放たれて」という表現がぴったりだったのでしよう。
堂哉さん……下五が素敵。満員のケーブル？から降りたら空気が美味しいで
しよう。

けい子さん……登山駅から放たれてで目の前に広がる花野が見えました。

七点句

お六櫛良夜の木曾に求めけり

康敏

とみ子さん……良夜の木曾の美しさに魅かれました。櫛をどなたに買われたので
しようか。

恵洲さん……すこし古風な日本の女性の奥ゆかしさを感じます。(まさか男性の句
ではないよね?)良夜の木曾という舞台がまたいいです。

允章さん……木曾街道は馬籠あたりか、満月に誘われ宿場町を散策。ふと街道名
物お六櫛を見つけ、これを買いたいと云うことであろう。景が良
く見える。

三恵さん……知識不足で「お六櫛」を知らず、ネットで調べました。事象だけと
らえると特に普通の出来事ですが、なぜかミステリアスでロマン
チックな印象を受けました。

盛雄さん……木曾街道藪原、奈良井宿の土産に求めた黄楊の櫛、タイムトンネル
に入ったような、作者の詩情にあふれた一句。

山峡の田にぼつねんと稲刈機

びん

くにおさん……強力な稲刈機(コンバイン)で棚田の一枚や二枚は半日で終わって
しまう。ひと昔前の一家総出の稲刈の景とは隔世の感がある。山峡
の静寂な昼下りの景である。

堂哉さん……お疲れさん、一服ですね!

ゆたかさん……山峡の田と稲刈機の取り合わせが絶妙です。「ぼつねんと」という表
現もいいです。情景が目には浮かびます。

六点句

隣人愛を説くトルストイ露寒し

盛雄

くにおさん……トルストイの小説の読後感だと思ふ。ただ、この句を時事句として
も鑑賞できるのではないだろうか。作者はこの「露」にはロシア
「露西亜」の「露」を掛けている。ウクライナへの侵攻に対する
ロシア国内の寒々とした世情が伺える。ウクライナの州併合宣言
で一層「露寒し」が際立ってくる。

健介さん……そう、ロシア人にも人間らしさはあるはずなんですがね。

龍平さん……又々 プレストリットフスク紛いをやるッすか。あの国に生まれ
なくて良かった。

曼殊沙華明治を刻す墓の脇

啓子

千恵さん……墓の脇に咲く曼殊沙華に気付くとその墓は明治に建てられたと気付
く。その瞬間、200余年という時間を感じることに共感です。

隆さん・・・お彼岸を知らせるように厳格に咲く。営々と続く毎年の光景。

五点句

沈む陽が長い影成す秋の街

忠彦

孤舟さん・・・背の高い「時の鐘」が夕陽を受けて道路に長い影を落している。ただしげさん・・・秋の情感を日暮れの街の影で上手く表現している。

四点句

至福なり会津新酒の呑み比べ

忠彦

紀久男・・・上五の措辞が気に入り特選「天」酒好きならではの選句です。

秀山祭の丑之助の句を「地」とし、対と選句しております

秋の灯がやつと点る夜双葉町

忠彦

隆さん・・・二年の後、拠点区域の避難指示が解除された双葉町に灯りがついで

た感慨。「やつと」が散文的。「秋の夜にわずかな灯り双葉町」でも。

◎とんぼうの池面に触れてまた浮かび

五郎太

孤舟さん・・・とんぼの身軽で敏捷な動きが見える。

康敏さん・・・蜻蛉の産卵の様子の写真句。下五の表現が優れている。

坊ちゃんを読むは幾度目夜長し

健介

龍平さん・・・夏目は今も読ませます。「三四郎」は車中で知り合った人妻と名古屋

屋敷で下りたら偶々同じ旅館になりそして偶々蚊帳一本の同じ部屋

で寝る。翌朝分かれ際に女が言う「あなたは度胸の無い人ですね」

まだならば非お読み下さい。でも長いですよ 朗読でも二〇時間超

え。

隆さん・・・名著は繰り返し返し読まれる。長い夜も味方する。

蒼天に翼を交はし鷹渡る

孤舟

敏郎さん・・・壮大な天空の世界が描かれる。

康敏さん・・・伊良湖岬の鷹渡りだろうか。条件が良ければ千羽もの大群が舞う

姿が見られると言う。まさに「翼を交わし」だ。

秋高し海豚のショーの揃ひ跳び

孤舟

恵洲さん・・・秋空に向かつてのイルカの大ジャンプが「秋高し」の季語によく似

あいます。

康敏さん・・・青空の下豪快な水しぶきを浴びて、観客は大喜び。しかし、動物愛

護の精神から世界的にイルカのショーは取り止め傾向にある。

葬列の威風堂々空高し

五郎太

千恵さん・・・秋晴れのロンドンの空の下を海軍兵士が棺をかかげ整然と行進して

いく光景は正に威風堂々でした。

隆さん・・・エリザベス女王の国葬はBBCライブで、〇時間見た。ウエスト

ミンスター寺院からウィンザー城内のセント・ジョージ礼拝堂まで

の行進（野辺送り）は圧巻だった。バグパイプの音色、合間に鳴る

汽笛は悲しみを一層誘った。沿道の国民は色とりどりの薔薇の花を

柩に乗せた車に投げた。車は薔薇の花を被ったまま礼拝堂に到着し

た。

新人の素顔知らぬ間秋深む

健介

亜也さん・・・早や三年、早や半年…。

知事賞は宜(むべ) 風格の大南瓜

恵洲

天牛さん・・・宜なるかな、ですね!!

盛雄さん・・・誰しもが認めた立派な大南瓜。農業祭の品評会での嬉しい風景。

雨雲の包む戸隠山(とがくし) 蕎麦の花 康敏

天牛さん・・・「遠山に日のあたりたる」句を思い出しました。

十六夜はシャンソンの夜美酒の夜

堂哉

ゆたかさん・・・シャンソンと香り高いワインの取り合わせがいいです。十六夜の月の出を待つ雰囲気を読み取れます。

盛雄さん・・・羨ましいかぎりです。飲み過ぎない様に。

◎八海山(はつかい)の細流を梳く下り築 びん

孤舟さん・・・新潟県の魚野川は鮎釣りの名所。

くにおさん・・・南魚沼の魚野川ではないだろうか。産卵を終えて下る鮎を獲る仕掛けが下り築。川幅を狭め、流れが築を越えてゆく。その後には落鮎がくま匹跳ねている。そんな景が浮かぶ。

康敏さん・・・峻険な霊山八海山がよく表現されている。中七の表現に感心した。
ど根性や岩の割れ目に草の花 昇

くにおさん・・・まさかと思えるところで秋草が小さな花を付けている。その生命力の強さを「ど根性」と表現した。

ゆたかさん・・・可憐な花にど根性の取り合わせ、度肝をぬかれました。

宵闇や犬引く人は無口なり

けい子

康敏さん・・・秋の夕方犬に散歩をさせている人。声を掛けても、無口な人で黙礼するのみ。「やと来たら流せ」というから、下五は「無口なる」では。

紀久男・・・犬引く人「は」、を、犬引く人「の」、にしたほうが良いのでは？

康敏さんのコメントにあるように、下五は「無口なる」に賛成です。

大の字に寝て見る空や花野行き

けい子

ゆたかさん・・・花野に大の字になって空を見上げるとさぞ気分がいいでしょうね。一度やってみたいです。

三点句

銀杏の強く匂ひし夜の坂

五郎太

天牛さん・・・夜の坂に対して「強く」が効いていますね。

探偵の好きなギムレット九月かな

五郎太

孝岳さん・・・昔読んだ小説「ロング・グッドバイ」の中、「ギムレットには早すぎる。」の名セリフを思い出し、フィリップ・マールロウに再会したような懐かしさで感動しました。

幕外で霊を鎮める秀山祭

五郎太

亜也さん・・・例年のこの公演への亡き吉右衛門の思い入れが深かったのを思い出します。

◎泊船の灯更けゆく鯨の秋

くにお

孤舟さん・・・停泊中の客船の窓の灯が、一つづつ消えてゆく。

啓子さん・・・鯨は海岸の突堤でも港内でも年中釣れる魚ではありません。作者のお

住まいと句の雰囲気から、新潟辺りの日本海側の景でしょう。日本的情緒が感じられます。

※五郎太さん・句会で、ハクセンノトモシと披講したところ、字余りでもトマリブネノ、つぎはアカリかとの声がありました。その方が景色が浮かびます。この港は昼はハゼつりで賑うという意味でしょうか。鯊の秋というのはよくある使い方ですが、季重なりになるとの評も出ました。

※紀久男・・・鯊の秋、となつていますが季重なりも気になり、態々「秋」と詠う必要があつたか？と感じます。

お彼岸のおはぎ懐かし母の味

國護

(紀・た・〇昇)

昇さん・・・子供の頃、お彼岸に母が粒餡のおはぎを作つて呉れたものです。

カレーと同様に母の味は格別で今でも思い出します。

◎秋なればポトンと落ちる夜の帷

啓子

(紀・孤・〇敏)

孤舟さん・・・秋の日は釣瓶落し。

敏郎さん・・・「ポトン」夜の帷」など表現が巧み。

月の雨波は静かにリズム取る

けい子

(紀・〇五・龍)

五郎太さん・・・雨月の句。残念とかではなく、波を詠ったのが上手。天。今年は

中秋の満月が見れましたが。

龍平さん・・・大宇宙の静かな営み 此のように感じる幸せ。

二点

アカンタレ夫婦で手術(オペ)の秋彼岸

紀久男

(健・龍)

(胃癌と難聴)

龍平さん・・・そして結果 成功!! 上級国民ヤンカ。

◎いつからか老人とされ敬老の日

忠彦

(紀・孤)

孤舟さん・・・”村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさん”と歌われたのは

昭和十六年。それが今では・・・。

ブランコの影絵となりて秋入日

とみ子

(堂・ゆ)

堂哉さん・・・昔、ドーバーに臨む秋の海岸で若いカップルが抱き合つてから、別

れるのを見ました。影絵でした。

ゆたかさん・・・影絵という表現がきいています。

※紀久男・・・残念ながら季重なりです。ブランコは春の季語に入っております。

蚊の声にさつと手の出る秋団扇

ただしげ

(忠・隆)

隆さん・・・秋の蚊は弱弱い形をしながらしぶとい。現実には「さつと」だが、

詩的表現としては「そつと」がいい。「秋の蚊やそつとつぶさる腕の

上(へ)に」でも。

※紀久男・・・残念ながら季重なりです。

秀山祭松島屋の大星

名調子仁左の大星秋芝居

ただしげ

(紀・と)

紀久男・・・体調不良で一時休演していたとは思えぬひとときわ大きな科白まわし。

蛸の声聞く夕べ愁い有

ゆたか

(紀・た)

ただしげさん・・・蛸の声から秋のもの悲しさを感じる作者の気持ち理解できる。

庭の樹々鳥来て囀る秋賛歌

ゆたか

(た・雅)

ただしげさん・庭に来る鳥の囀りが秋の讃歌に聞こえる。秋の感傷的感じが読み取れる。

※康敏さん・・・「囀」は、繁殖期の雄の鳥が縄張りを宣言し、雌への呼びかけを兼ねた鳴き声で春の季語。地鳴きとは異なる。

紀久男・・・残念ながら季重なりです。鳥来るも秋です。

この道や電柱つづく真葛原 びん (紀・○亜)

亜也さん・・・なにげない風景に見出したものの重みと深さ。

震災忌孫の云ふなりスマホ買ふ 天牛 (紀・と)

とみ子さん・・・お孫さんの優しいお気持ち嬉しそうですね。

向う疵は力士の矜持天高し 盛雄 (紀・く)

くにおさん・・・力士は眉の上に絆創膏を貼っている。一瞬の立合いが勝負の鍵を握る。お互いがぶつかって出来る向う疵は力士の証であり、誇りでもある。「天高し」は力士の心意気

一点

仁左衛門らの一力茶屋の場

病み上がり仁左の九月は絶好調 紀久男 (健)

※紀久男(自解)・・・病休復帰とは思えぬとびぬけた名調子。「松嶋屋！」と大向う出来ないもどかしさ。拍手では物足りません。

秀山祭の丑之助の好演

じいじいのうれし涙や秋芝居 ただしげ (紀)

紀久男・・・次点の「地」に選びました。惜しまれて亡くなった吉右衛門の原作・構成「藤戸」を、女婿の菊之助親子が熱演し喝采を浴びました。嬉しげな吉右衛門を髣髴とさせる好句です。



【青葉会予定】

令和四年十月二十七日(木) 会場：三軒茶屋 しゃれなあと(世田谷区施設) 4階会議室

時間：十二時～十六時半

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：十月二十五日(火)中。

◇ご参加のご意向、投句は今井宛Eメールか郵送、或いは星田メール宛お願い致します。

◇ご参加の方で三軒茶屋しゃれなあとでは初めての方は星田 ☎(080-8870-8201)までお問い合わせください。ご説明致します。



青葉会報

一、今回は小生の胃癌手術の為、全ての投句引き受けなど啓子さんに引受けて貰い、治療恢復に専念。句会ご出席者の方々へは状況を口頭で伝えていただき、且つ、皆さまへの選句依頼時にメールの方には同様の報告をして貰い、6月22日には郵送選句依頼にご挨拶状をお送りしましたが、文面通りに内視鏡による画期的なオペを日本医大永山病院にて実施して成功。わずか一週間で無事退院出来ました。肝心の声も出ます。これ偏にご心配下さつ

た皆様のお蔭と感謝申し上げます次第です。

一方当日は 孤舟選者はもとより、びんさんをはじめ東京青葉会の現役女性会員三名全員の出席を得、∞名の出席。今回の会場は初めての場所で、五反田の立派な集会所でした。孤舟選者のお嬢様がお住まいのマンションに附帯した集会所で、ご紹介下さったものです。結局日程の確保、申込、最後の見届けなどお世話になり、改めて、この紙上で御礼申し上げます。この集会所は大変居心地の良い、広く静かな環境の中にあります。今後三軒茶屋が取れない時などお世話になることになるかと思えます。句会はいつものように孤舟選者、千恵さん、啓子持ち寄りの日本酒やとみ子さん持参のお菓子などをいただきつつ、五郎太さんの披講で手際よく進み、ご覧の通り、孤舟さん、啓子、紀久男さん、康敏さんが高得点でした。また、今回初めて投句された、くにおさんにも票が集まっております。早いうちの選句、加えて句評、短評も多く頂戴しました。日頃の皆さまのご協力に感謝申し上げます。(この段啓子記)

二、 関係者近詠

綻ぶも早や散るも百合礼拝中	眞希子	書き継ぎし自分史消去して昼寝	陽亮
夫婦の間煮詰めず冷やさず心太	全	麦飯のほひの向かう少年期	全
コロナ七波壁にみっしり蟬の殻	全	書き出しに臆し書かざる夏見舞	全
しばらくは伸びて尺取虫風まかせ	弘子	もろもろの快樂(けらく)の果ての草むしり	全
使ひかと思へてならぬ黒揚羽	全	金婚を祝ふ独酌冷酒(ひや)で飲む	紀久男
夏藤の覆ふ四阿象のごと	全	涼し気に海老蔵睨むも疫はびこる	全
やぶれ傘なにもそこまで破れずとも	全	シーボルトの妻の名つけし額の花	全
晴れぬ日の胸に香水ひとしるし	全		

——「森の座」十月号(横澤放川選)

太陽の塔へ残暑お見舞い申し上ぐ	盛雄	網戸より何を訴ふ油蟬	健介
秋暑しいつか吾も初期の惚け	盛雄	籠り居て読むは清張戻り梅雨	全
村の名は昔のままや地藏盆	全	待たされし初秋の朝の心地よき	紀久男
棲みついて吾と戯る蜥蜴の子	全	夜も残暑戦中歌謡高唱す	全
		朝餉すみ残暑しのぎに図書館へ	全

——「きさらぎ句会」八月

秋澄むや深紅の御旗陸奥へ	堂哉	天たかし運河に横たふスカイツリ	允章
宿遠く芒ヶ原の暮れ泥む	全	もの思いつつ独り酌むなり十三夜	全
訃報疾く地球を巡る秋薔薇	全		

三、 孤舟選者近詠

闇に踏む径そこここに螢の火
 麩のごとき稚児の寢息星月夜
 白扇を閉ぢて本音を漏らし初む
 夕焼を孕み帆船戻り来る
 生き方はいつも控え目月見草

令和四年 十月 八日

紀久男 記